

ゆりの声

戸部 順一

しかし、もっとも興味深い昆虫はなんといっても蝉である。熱帯地方のあの素晴らしい蝉でさえ、日本の木々からこの上ない歌声を披露する、この蝉の音楽家にはかなわないだろう。暑い季節の間、途切れることなく、入れ替わり立ち替わりまったく鳴き声の異なるせみが次々と登場してくるので、煩わしいと思うことがない。(ラフカディオ・ハーン『日本の面影—日本の庭にて』池田雅之訳、新潮文庫版)

きっかけ：「昆虫の鳴き声を愛でる民族にギリシア人がいたと、ハーンが触れているらしいのだが、古代のギリシア人もわれわれ同様に、そんな風流な習慣があったのかい」

かなり前のことなので、1年前のことだったか、2年前のことだったか、正確な日は記憶から抜けてしまっているが、時刻と場所は今でも思い出すことができる。すなわち、午後十時ころ、場所は成城学園前駅のホーム。何かの会議を終え、家路を急ごうとする筆者に、どこかで楽しく時を過ごしていたのか、少々酒気を帯びた同僚二人が上述のような質問を投げかけてきた。とっさのことゆえ、そんなことに触れている古典作品を思い出すことができなかつた筆者は、疲れていたせいもあり「あるかも知れぬ」と、何の情報も含まない返答を口にして、電車に乗り込んだ。

電車に乗ったものの座ることもできず、それゆえ当然のことながら、眠ることもできず、半ば仕方なしに、ホームで同僚から言われた質問を、もう少し真剣に考えてみることにした。

1. そもそも、ハーンはどんな虫について語っているのか。真っ先に思いつくのはコオロギ、それに鈴虫とキリギリスといった虫だが、ハーン

もそれらの昆虫について、日本人とギリシア人の比較を試みているのか（ハーンの作品を殆ど読んだことのない筆者には見当がつかなかった）。

2. 虫の声について触れているギリシア語の記事を目にした記憶があるか。

1については、関心が持続していればのことだが、後日に調べることで、2については、これは自分の頭の中をかき回せばよいのだから、電車の中でも可能な作業であるゆえ、早速に開始した。

まず思い出したこと：鳴く虫の代表として思い出されるのはコオロギ = akris（上述 1. においても筆者はそうであった）である。鳴く（音を出す）昆虫についての記事は、アリストテレスの『動物誌』にありそうだが⁽¹⁾、その音を心地よいものとして聞いていたかどうかは触れられていなかったはずだ。韻文資料を思い出そうと努めるも、ほとんど頭は回転せず、もっとポピュラーで、誰でも知っていなければならない詩行があるはずなのに、何かの拍子に見た *Anthologia Graeca* にコオロギのことが出てきたのを唐突に思い出した⁽²⁾。席も空き、座ることができた筆者は、最初の願望であった睡眠補給へと向かう。しかし、睡魔に襲われた瞬間、もうひとつの鳴く昆虫のことが思い出され、それは34年前の記憶を呼び起こすことになった。

34年前の記憶：筆者、大学3年生のときのことである。[西洋古典学特殊講義]の時間（月曜日の2限目。K先生担当）はホメロス作『イーリアス』の講読にあてられていた。第1巻から講読を開始した授業は、第2巻を飛ばし読みし⁽³⁾、秋のころに第3巻に入った。その冒頭に、鳴く昆虫、セミが登

場する。授業で問題にされたのは、「セミの声」についてであった。

heiato demogerontes epi Skaiesi pyleisi,
gerai de polemoio pepaumenoi, all' agoretai
esthloi, tettigessin coikotes, hoi te kath' hylon
dendrei ephezomenoi opa leirioessan hieisi;
toioi ara Troon hegetores hent' epi pyrgoi. *Il.* 3, 149–153

長老たちはスカイア門に座っていた
老齢ゆえに、戦からは離れているものの、優れた
弁舌家たちだ、それはセミたちに似ている、森の
木に止まって、百合のような声を放っているあのセミだ、
そのように、トロイアの指導者たちは城壁の櫓に座っていた。

10年も続いた戦に決着をつけようと、パリスとメネラオスが一騎打ちに臨もうとしている。いずれが勝ちをおさめるのか、城壁からトロイの長老たちが固唾を飲んで戦場を眺めている。そんな段である。その長老たちは、上に引用した詩行にあるように、木に止まり鳴くセミに譬えられている。

誰が担当者でこの部分を訳したかは忘れてしまったが、K 先生は *leirioessa ops* をどう訳すべきか、参加者に尋ねた。*LSJ* に載っている意味に基づいて訳せば、形容詞の *leirioeis, essa, en* は「百合に似ている = lily-like」とあるゆえ、上のような訳になるはずである。「では……、百合に似た声とはどんな声だと思うか」と、重ねて先生が質問してきた。授業で筆者が使用していた注釈付のテキストは、W. Leaf の校訂によるもの⁽⁴⁾。すぐ

に当該箇所の注に目を遣ったが、質問の答えになるようなことは書いていない⁽⁵⁾。さて、先生がどんな答を出してくれたのかは、さっぱり思い出せないのだが、一番若く、怖いもの知らずで、無知の権化であった筆者は「エジソンの……」と口走り、それから黙り込んでしまったのを記憶している。授業の後で、助手の M さんが「ちゃんと調べたら」と言ってきたが、曖昧に頷いたまま、30年以上が過ぎてしまった。

そんなことを電車の中で思い出しながら、また時間が過ぎた。

現在——2008年1月、個人研究室（以下の考察は22平米の空間でのもの）：ハーンが日本のセミについて強い関心を抱いていたことは、冒頭の『日本の面影——日本の庭園にて』の一節からも知られる。現代の欧米人がセミの鳴き声を「耳障り」と感じるのに反し、ハーンがセミの鳴き声を愛でているのは、脳の左右どちらで鳴き声を聞いていたかが問題ではなく、古代ギリシア人の血が幾分かは流れていたからだ、と思いたい。

古代ギリシア人はセミの鳴き声を不快には思わなかったらしい。セミの鳴き声に耳を傾けるソクラテスは、この昆虫の起源を伝える神話——食べることも飲むことも忘れて歌い続けて死んだ人間の生まれ変わりがセミだ——をパイドロスに語りながら、ムーサとの関係を説明している⁽⁶⁾。アリストテレスがセミの鳴き声を「歌う——aeidein」と繰り返し言っているのも、ムーサとの関係を匂わせてのこととも解せる⁽⁷⁾。ステニコロスも、その鳴き声に aeidein を使っている⁽⁸⁾。古代ギリシアのセミがどんな鳴き声をしていたのかは、不勉強にも筆者は知らないが、仮に「ミーン・ミーン・ミン・ミー」あるいは「ジジ・ジー」と鳴いたなら⁽⁹⁾、*Il. 3, 152* のセミの声をあらわす *leirioessa ops* にも「ミーンミーン」の反映があることになる。「ミーンミ

ーン」を表すギリシア語の擬音語は知らないが、例えばヘシオドスはセミの鳴き声を、*tettix / dendreo epezhomenos ligyren katakeuet' aoiden*⁽¹⁰⁾ と、*ligys, eia, y* (澄んだ、鋭く響く) なる形容詞で表している。アルカイオスの詩にも *ligyran aoidan* とセミの鳴き声を表現した箇所があるが、これはヘシオドスの詩を真似たものと思われる⁽¹¹⁾。アリストパネスは『鳥』の中で、*thespesios oxy melos akhetas / ...boa.* と、*oxys, eia, y* (鋭い、尖った) という形容詞をセミの鳴き声に付加している⁽¹²⁾。これらから、どうもセミの鳴き声は「澄んでいて、よく響く」と捉えられていたようだ。これが古代ギリシア人の「ミーンミーン」の表現である⁽¹³⁾。スパルタ人の方言では、セミは *ligantar* と呼ばれたようだが、この語にも *ligys* が含まれている⁽¹⁴⁾。

II. 3, 152 に戻ろう。この箇所ではセミの鳴き声は *leirioessa ops* と表現されていた。とすれば、*leirioeis, essa, en* にも「鋭く、響き渡る」意味があることになろう。

leirioeis は *leirion* (*LSJ* によれば「Madonna lily, 白百合=*lilium candidum*」とある) を語幹に持つ形容詞である⁽¹⁵⁾。この「ゆりのような(もっと正確には「ゆりでいっぱい」)⁽¹⁶⁾」がどうしてセミの鳴き声を形容することになるのか、は古代から多くの先達の頭を悩ませてきたらしい。この箇所につけられている古注 T は、*opa leirioessan: antheran. para ta leiria, apo ton horomenon epi ta akouomena.*⁽¹⁷⁾ と *synaesthetic metaphor* の可能性を示唆している⁽¹⁸⁾。では、ゆりの何を見て、それを音(セミの鳴き声)の比喩に用いようと発想したのか。古代の語義解説者は、II. 13, 830f. での *leirioeis* の使用例をもとに、ある方向性を定めたようである。そこでは、*emon dory makron, ho toi khroa leirioenta / dapsei*

(私=ヘクトルの長い槍が、そのゆりのような肌=アイアスの肌を貪り食らうであろう)と、英雄アイアスの肌の色を形容している。英雄の肌が柔肌であるのは、ホメロスが *terena khroa* (柔らかい肌), *khroa leukon* (白い肌)⁽¹⁹⁾ と言っていることから知られよう。青銅のアレス=*khalkeos Ares* の肌も美しい=*khroa kalon* (*Il.* 5, 858) と表現されている。もっとも浅黒くて硬い印象を与える肌では、槍の穂先の鋭利さはかすんでしまう。おそらくは穂先=鋭利との対比の必然から「やわらかくて白い」=切り裂かれやすい肌になっているのだろう⁽²⁰⁾。

肌を形容する *teren*, *leukos* を *leirioeis* に照射して、後代の lexicographer たちは *leirioeis* の語義決定を行ったように見える。ヘシユキオス⁽²¹⁾ は、その語義解説の中で、*hapalos*, *prosenes*, *hedys* といった形容詞を登場させている。中世の辞典 *Suida*⁽²²⁾ にも同様な解説があり、*hapalos*, *leiotes*, *prosenes*, *terpnos*, *hedys* なる形容詞で、その語義を決定しようとしている。バッキュリデスのディテュランボス (17) には、*kata leirion t' ommaton dakry kheon* とアテナイの若者たちの目を *leirioeis* が形容する詩行があるが、*Suida* の *leirophthalmos* の語義解釈 (*ho proseneis ekhon tous ophthalmous*=やさしい目をした人) を根拠に、*eyes of delicate beauty*, *bright young eyes*, *tender eyes* と、訳される⁽²³⁾。これも *Il.* 13, 830 の例が「ゆりの目」のイメージの根源にあるからと言えそうだ。

ゆりの花卉の色合い (=白としておく) と、その柔らかさ (これが *ta horomena* の正体)⁽²⁴⁾ が、澄んだ、よく響き渡るセミの声 (*ta akouomena*) の比喩になった、とするのが妥当なところかもしれない。白い (*leukos*) 花卉と澄んだ (*ligys*) 声との *synaesthetic metaphor* の成立は、アリストテ

レスが示唆しているところであり⁽²⁵⁾、ラテン語まで視野を広げれば *vox candida* が証明している。

ところで *leirioeis* な声はセミに限らず、ムーサの声の譬えとしてもある。ヘシオドスは、『神統記』40-3で、*gelai de te domata patros / Zenos erigdoupoio thean opi leirioessei / skidnamenei, ekhei de kare niphontos Olympou / domata t' athanaton* (雷鳴をとどろかす父ゼウスの館は、女神たちの広がり行くゆりの声に笑いを響き返し、雪の積もったオリュンポス山の嶺々と不死なる神々の館が鳴り渡る)と、歌っている。女神たち=ムーサたちの声もセミ同様に(あるいは、その逆と考えてもよいだろう)「澄んだ、優しい」声だったのだろう。ただし、*gelan, ekhein* はムーサの声の音量が尋常ではなかったことを仄めかしているように思われる⁽²⁶⁾。彼女たちの声が辺りに響き渡る様子は、*peri d' iakhe gaia melaina / hymneusais* (彼女らが歌うと、その声は周りの黒き大地にこだまする *Th.* 69f.)からも知られる。考えてみれば、人間の上位者である神(女神)が、人間よりも声の大きいのは当たり前かもしれない。槍で傷ついたアレスの悲鳴は人間の1万倍だったとある⁽²⁷⁾。ヘラの叫び声(*aein*)の音量は、その姿を伝令のステントル⁽²⁸⁾に変えていたせいも、並外れていたようだ⁽²⁹⁾。人間離れした英雄たちの声も大音量だと表現される⁽³⁰⁾。してみると、*leirioessa ops* にも「大きい音」のイメージがなくてはならない。ただ「澄んだ、花卉のような柔らかく心地よい」音ではなく、その澄んだ音は遠くまで響き渡らねばならない。

アポロニオスはセイレンの声を *leirion* で形容している⁽³¹⁾。美声によって人を食い殺す怪物の声が届く範囲は、*Od.* 12, 181によれば「人の叫び声が届くほど= *tosson apen hosson te gegone boesas*」になるが、これが

「小さい声」なのか「大きい声」なのかは、判断の分かれるところかもしれないが⁽³²⁾、それでも「柔らかな声」でないのは確かだ。怪物たちはオデュッセウスの船が近づくと、「響き渡る歌 *ligyren aoiden*」(181)を口にすると⁽³³⁾。セイレンの美声も大音量だったと考えるのが妥当なところだろう。

その声に *leirioeis* なる形容詞がつく、ムーサ、セイレン、セミの声(鳴き声)⁽³⁴⁾には、等しく *ligys* が現れる⁽³⁵⁾。*ligys* の意味に音量の大きいことが含まれるのは、たとえば *ligyphthoggos* がホメロスでは常に伝令の枕詞として登場することからも察しがつく⁽³⁶⁾。伝令の声が大きいのはステントルの例を思い出せば十分だろう。これらのことから「ゆりの声」は単に透きとおった美しい声ではなく、あたりに響き渡るような声を意味していた、という推測がなりたちそうだ。

そもその *Il.* 3, 152 に戻ろう。そこでは、木に止まるセミの様子が、櫓で見物する老人たちの比喩に使用されていた。この比喩が「木の上に並ぶセミ：櫓の上に集まった老人たち」の比較によって成立しているのではないのは、この詩行の振りを、ティモンが弁論家プラトンの賛辞に使用していることから明らかだ⁽³⁷⁾。プラトンの声、そして優れた弁舌家と呼ばれている老人たち (*agoretai esthloi*) の声もセミの鳴き声に似ていたのである。今でこそ、高齢を理由に戦場に出かけることこそないとはいえ、名だたるトロイの勇士たちの声が、小さかろうはずがない。その声も *ligys* が伝える「響き渡る」声だったに違いない。ちなみに *agoretas* にも *ligys* が形容することは確認できる (*ligys Pylon agoretas* とはネストルのこと。*Il.* 1, 248 に登場)。とすれば、*leirioessa ops* は「大きい声」の意味になるのではないか。

「響き渡る」音は楽器の音色を語るときにも使われる。リラの音、箏の音、アウロスの音等々⁽³⁸⁾が *ligys* に形容されている。楽器から流れ出る

(爪弾かれる)音が広間にこだまするといったイメージは捉えやすい。では、それとゆりの関係は？ ホメロス(あるいは叙事詩)の植物名を用いた比喩表現で思いつくものに、曙(エーオース)の枕詞 *rododaktylos* (ばら色の指をした)がある。これは水平線(地平線)から天上高く伸びていく光線の色をバラの花弁の色で語ったものだ。海の枕詞の *ioeides* (スマレのような)も、色に関する比喩。しかし、*Od.* 6, 231 の、「(アテナはオデュッセウスの髪を)ヒヤシンスの花に似たふさふさの髪に変えた *oulas heke komas, hyakinthinoi anthei homoias*」は微妙だ。エウスタティオスは、ヒヤシンス(*hyakinthos*)の花弁の色とオデュッセウスの黒髪との比喩であると説明する一方で、オデュッセウスの巻き毛への比喩としてヒヤシンスが持ち出されている、とも解説している⁽³⁹⁾。後者の解説を採用すれば、花の形からの比喩ということがあったことになる。そうだとすれば、古注 T にあった説明=*apo ton horomenon* は、ゆりの花弁(の色)ではなく、ゆりの姿そのものを指している、とも解せる。では、はたして、ゆりの姿をセミの声に求めることは可能だろうか。

古代、セミは体のどこで鳴き声を出すと考えられていたのか。これに答えているのはアリストテレスだが⁽⁴⁰⁾、彼ほどに昆虫観察に熱中しなかった者には「唇から」と思われていたようだ⁽⁴¹⁾。ところで、セミは「何一つ食料を必要とせず、飲まず、食わず、歌い続けて死ぬ」⁽⁴²⁾と、考えられていた。実際には、あの管のような口で樹液を吸って生きていることは、われわれなら知っている。ならば、ソクラテスは木の高いところで樹液を吸うセミの姿を、どう思っていたのか。セミの口管(管楽器に見えないことはない)⁽⁴³⁾を木に突き立て鳴いている(同時であるのかは不明)様子は、アウロスを吹いている姿に見えないこともない。I. G.⁽⁴⁴⁾を仮に「楽しげな嘴で、

ゆり（の音）を注ぎだしている」セミと訳すなら、そして *LSJ* で見かけた *tettigon ligyn ekhos* と *aulou ekhos* に共通した響きを聞いたら⁽⁴⁵⁾、「ゆり（の音）」とは「ゆり状の楽器の音」ということにならないだろうか⁽⁴⁶⁾。

ゆりの姿＝セミの口管＝アウロスに共通性を見ることは可能だ。ゆりの声＝セミの鳴き声＝アウロスの音はすべて *ligys* に置換できる。老人たちの声、弁論家の声もまた *ligys* に繋がる。よって *Il.* 3, 152 の「ゆりの声」とは、ゆりのような形をした楽器が出すような大きな音のことと考えたい。

「エジソンの」と言っても、口には出さなかったメガフォンの形状は、34年後に、以上のようなことを筆者に調べさせた⁽⁴⁷⁾。

[注]

- (1) 思い出したことは、後でできうる限り確認した。結果、*Arist. H. A.* 535b に出てくる。
- (2) H. Bbeckby, *Anthologia Graeca*, Munich, 1957, 7巻, 190以下=190, 192, 194 etc. にはコオロギに関する詩歌がまとめて出てくる。例えば192 には「鋭い音を立てる羽で、お前はもう歌うことはないだろう、パッタ (*akris*) よ、実り豊かな畝に隠れて、影を作る茂みに寝そべる私を楽しますこともなかりょう、よく動く羽で甘い歌をつむぎながら」といった歌がある。
- (3) その代わりとして、有名な「船のカタログ」の段については、*Denys Page, History and The Homeric Iliad*, Berkeley and Los Angeles, 1959 を、各人、大急ぎで通読することが義務付けられた。
- (4) *W. Leaf, The Iliad*, sec. ed., London, 1900.
- (5) it looks as though some different word of forgotten meaning had been corrupted into a more familiar form. とあり、これでは意味の特定は到底、不可能なことになる。
- (6) *Pl. Phdr.* 259A-D.
- (7) 注1 参照。

- (8) Arist. *Rh.* 1412a 23.
- (9) ムーサとセミを結びつける根拠は、この昆虫の鳴き声が一本調子ではなく、例えば「長長短短」といったリズムを持っていたからかもしれない。そこに詩の韻律との類似を感得したのではないだろうか。
- (10) Hes. *Op.* 583f. この箇所については、M. L. West, *Works and Days*, Oxford, 1978, pp. 304f. を参照。
- (11) H. W. Smyth, *Greek Melic Poets*, New York, 1963, Alkaios, XIX, l.4 および、その箇所への注を参照。
- (12) *Av.* 1095f.
- (13) セミの鳴き声は、夏の暑さゆえにすべてが静止したような状況との対比として触れられている。上で引用した Hes. *Op.* 583f. への West の注を参照。同様な情景は *Ar. Av.* 1095f. あるいは、*Ar. fr.* 10 (Kock 版) もしかり。
- (14) Hsch, *ligantar* の項目には、語義は *tettiges* のこと、とある Hsch については、M. Schmidt, *Hesychius Alexandrinus Lexicon*, Amsterdam, 1965 を使用。
- (15) P. Chantraine, *Dictionnaire Etymologique de la Langue Greque*, Paris, 1968; *leirion* の項を参照。ホメロス自身は *leirion* (ゆり、あるいは何かの花) に言及していない。この語が花の意味で登場するのはホメロス風デメテル讃歌428行が最初。また、*leirioeis*, *leirion* は「白百合」とは関係がないのではないか、という意見もある。例えば R. B. Egan 'leirioeis etc. in Homer and Elsewhere' *Glotta*, LXIII, 1958, pp. 14-24。
- (16) Leaf の3巻152行への注を参照。また呉茂一訳『イーリアス』岩波文庫版の略注には「百合花に豊かな」とある。
- (17) 古注については H. Erbse, *Scholια graeca in Homeri Iliadem*, Berlin, 1969 を使用。
- (18) これについては、W. B. Stanford, 'The lily voice of cicadas (Iliad 3.152),' *Phoenix* 23, 1969, pp. 3-8 を参照。
- (19) *Il.* 13, 553, 14, 406 では *teren* が、また 11, 573=15, 316 では *leukos* が肌を形容している。R. Janko, *The Iliad: A Commentary*, vol. IV, Cambridge, 1992, 13, 830-2 の注を参照。
- (20) アテナがオデュッセウスを、乞食の姿から元の姿に戻す際に、この英雄の

- 肌の色を黒く=melagkhroies している。Od. 16, 175 を参照。
- (21) Hsch. leirioenta の項を参照。
- (22) leirioenta の項。Suida に関しては、A. Adler, *Lexicographi Graeci Suidae Lexicon*, Stuttgart, 1967 を使用。
- (23) R. C. Jebb, *Bacchylides: The Poems and Fragments*, Hildesheim, 1967, pp. 384-6 および D. A. Campbell, *Greek Lyric Poetry: A selection*, Glasgow, 1967, p. 438 を参照。
- (24) 古代の lexicon は、この柔らかいにもしろ重点を置いている。よって、fine, delicate と言った意味が強くなる。しかし、その結果が leptaleei phonei (Il. 18, 570f.) を想起させるなら、力強いイメージは消えてしまう。Pollux は、へたくそな役者=声の質が悪い役者のリストをこしらえているが、そこには leptophonos がある (D.F.A. p. 169 を参照)。またこの見解に関しては、M. L. West, *Hesiod Theogony*, Oxford, 1966, p. 171, l, 41 への注を参照。
- (25) Arist. *Top.* 107 a12. to leukon epi somatos khroma, epi de phones to euekoon.
- (26) この二つの動詞については、West (注24) 170f. を参照。
- (27) Il. 5, 859.
- (28) Arist. *Pol.* 7, 4 で「ステントルのような声を持たないなら、彼らの伝令にはなれない」と言っているから、ステントルが伝令であった、という言い伝えは定着していたと思われる。
- (29) Il. 5, 785f. 「勇ましく、青銅の声の持ち主であるステントルに姿を借り、その=ステントルの声の大きさは50人の男の声を合わせたほど」 Stentori eisamene megalētori khalkeophonoi / hos toson audesaskh' hoson alloi pentekonta.
- (30) 例えば、Il. 5, 855 「大声で誉れを得ているディオメデス」 boen agathos Diomedes. また 18, 219ff. では、アキレウスの声はラッパ (salpigx) の鳴り響く音に譬えられ、「青銅の声 opa khalkeon」と表現されている。
- (31) A. R. 4. 903, hiesan ek stomaton opa leirion. この詩行は Egan の論文から借用した。
- (32) 183の eggythen は近いというイメージを持たせるが、それでも海上と島の上の距離はかなりあると考えるべきだろう。

- (33) アポロニオスがセイレンの歌声に *leirioessa ops* を使用したのは、この形容詞に *ligys* の意味を持たせたかったから、と考えたいが、*Od.* 12, 192 にある *hieisai opa kallimon* とアポロニオスの *hiesan ek stomaton opa leirion* との相似的構造から、アポロニオスは *leirion* (あるいは *leirioeis*) の語義を「美しい=*kallos*」と捉えていた、と思われる。
- (34) 他にヘスペリデスにも *leirioessai Hesperides* と、この形容詞がついている (=Q. S. 2, 418f.) ことが Egan によって確認されている。Egan, p. 18 を参照。
- (35) ムーサに降臨を促すソクラテスは、*Mousai ligeiai* と歌い始める (Plat. *Phdr.* 237a)。*Od.* 24, 62 には *Mousa ligeia* がある。
- (36) *LSJ*, *ligyphthoggos* を参照。同じ語根を持つ *ligyros* の用例には *ligyra phone* の反対語として *lampra phone* が挙げられている。
- (37) D. L. III, 7 *agoretēs / hedyepēs, tettixin isographos, hoi th' Hekademou dendroi ephezomenoi opa leirioessan hiasin*.
- (38) *phormigx ligeia* は *Il.* 9, 186, *Od.* 8, 69etc. に。 *ligeia lotou* は E. *Heracl.* 892 に。 *aulou ligy ekhon* は Mosch. 2, 98 に出てくる。
- (39) *Eustathii Commentarii ad Homeri Odysseam*, Leipzig, 1825, 6, 231 への注を参照。ちなみに呉訳では「ヒヤシンスの色そっくり」また松平訳では「ヒュアキントスの花卉にも似て」とある。呉訳、松平訳とともに岩波文庫。
- (40) Arist. *H. A.* 535b.
- (41) I. G. 14, 1934, *kai tettix glykerois kheilesi leira kheon* と、*kheil* (唇、嘴) が登場。
- (42) Plat. *Phdr.* 259c.
- (43) 楽器の *aulos* が動物の器官の意味で用いられることはある。Arist. *H. A.* 589b を参照。*Od.* 22, 18 の *aulos pakhys* の表現は強烈だ。
- (44) 注41を参照。
- (45) *LSJ*, *ekhos* の項を参照。
- (46) *Orpb. Argon.* 255 (=Egan の論文に引用されている) の「胸からゆりの声を注ぎだす *apo stetheon opa leirion exelokheusa*」も、2行前の *phormigx* との連想から、「アウロスの音」と *opa leirion* を訳せないことはない。また、*apo stetheon* には、楽器に息を吹き込むイメージがあ

- る。
- (47) 管楽器がアウロスなのか、それともラッパ=salpigx なのか。ラッパのほうが音は大きいですが、音階はないので、イメージに合わない気もする。アキレウスを形容する opa khalkeon も金管楽器の音を言ったものかもしれない。大声の持ち主である伝令ステントルが「しゃべるラッパ」を考案した、という古注の解説 (auton heurein kai ten dia kokhlougraphen (mekhanen)) は、大声とラッパの関連を示唆している。古注に関しては、Leaf, vol. 1, p. 247 を参照。Egan は leirioeis (leirion) のすべての用例にあてはまる語義解釈を試みているが (その結果、leirioeis の意味は「湿った」といった意味になるが、説得力にはかける)、音への比喩と肌への比喩は別に考えたほうがよいかもしれないと言うのが、現在の心境である。